Report for Creating Peace and Happiness
Musashino University Creative Happiness Incubation

武蔵野大学しあわせ研究所通信 Vol.189

2026 年 10 月 28 日発行

関係人口拡大による地域コミュニティシステムのウェルビーイング向上の新たなモデルの構造化及び効果の可視化：隠岐・海士町を実証フィールドとして



研究員 保井俊之，客員研究員 坂倉杏介，永野真代

「地域のコミュニティと関わることで、人はどのように幸せになるのだろうか。」本研究は、この問いから出発しました。

コロナ禍を経て、私たちの地域での働き方や暮らし方は大きく変化し、そのつながりも定住する住民だけでなく、オンラインや自律分散組織(DAO)等の Web3.0 のデジタル基盤を通じて、地域外から継続的に関わる「関係人口」によるものが増えています。地域コミュニティは、地理的境界に閉じた存在から、バーチャルな接点を含む開かれたシステムへと変わりつつあります。その新しい地域コミュニティのシステムで、人はどのようにウェルビーイング(心身社会の幸せ)を追究するのでしょうか。

本研究は、地域活性化と新しい地域づくりの超先進地である離島・島根県隠岐郡海士町で始まった「オフィシャルアンバサダー制度」を実証フィールドに、こうした新しい地域コミュニティのウェルビーイングのカタチを明らかにすることを目指しました。まずインタビューや参与観察を通じてアンバサダーの語りを分析し、地域とのかかわりが「関心」と「関与」の深化という二つの軸で捉えられることを明らかにしました。

さらにその深化には段階があり、両者の組み合わせによって関係人口のあり方が多様に分かれることが分かりました。

続いて関係人口 113 名を対象とするオンライン調査を実施し、人生満足度等の一般的な幸福尺度及び地域固有の幸福度との関連を定量的に分析しました。その結果、関心の高さは一般的な幸福感と弱く、関与の深さは関係人口固有のウェルビーイングの実感と強く、それぞれ有意に関連していました。さらに分析結果で注目されたのは、地域で感じるウェルビーイングが媒介となり、地域外に住む人びとと地域コミュニティとのあいだに新たな結び目が生まれていた点です。オンライン上のやりとりやプロジェクトへのリアル参加を通じて、物理的には離れていても「自分もこの地域コミュニティの一員であり、やりたいことが出来ている」という感覚が醸成され、関心と関与が一層高まる。バーチャルな接続が、心理的な帰属と社会的実践を結びつけ、地域コミュニティの幸せの新たなかたちを立ち現れさせていました。

本研究は、こうした関心と関与の深化、地域のウェルビーイングを媒介とした新しい幸せ響創のプロセスを構造化・可視化する試みです。人口減少社会では地域の境界は固定されたものではなく、人が移動し、オンラインでもつながる時代に、地域外からの関係人口とともに協創される「もう一つの地域のしあわせ」の形が見え始めました。